

◆特集……敬語は何の役に立つか

# 中国語に敬語か

少ないのはなぜ？

彭 国 躍



## 一 はじめに

古代中国社会において、他者と自己のことを「尊、貴、高、大、賢、龍、芝／＼卑、賤、下、小、愚、犬、草……」などの概念を通して表現する複雑な敬語表現があった。このような敬語体系は、儒教の倫理体系の下位組織として組み込まれ、陰陽秩序に基づく礼法体系の言語的実現形として形成されたものである。

古代中国語に豊かな敬語表現があった事実を考えると、このテーマは、現代中国語になぜ敬語が少なくなったかということから考える必要がある。伝統的な敬語表現の衰退過程を追うことによって、そのなぞを解く手掛かりが見えてくるのではないか。

## 二 敬語はいつから少なくなったか

筆者はかつて、各時代の長編小説（三

編）を対象に、一四世紀から二〇世紀九〇年代にかけて敬語使用の変化を調べたことがある。七百年にわたる敬語の推移過程は、次頁の図のように示すことができる（詳細は彭「一九九」第九章を参照）。

この調査により、伝統的な敬語表現は一九世紀から二〇世紀初頭にかけて急激に減少し、二〇世紀半ばから体系として完全に消えたことが明らかになった。

## 三 敬語はなぜ少なくなったか

敬語は、言語現象（音韻、文法など）の中で最も社会とのかかわりの深い現象である。敬語はその言語社会の人間関係を映す鏡とも言われるだけに、社会の変化を見ずに、敬語変化の要因を語ること

(単位名：%)

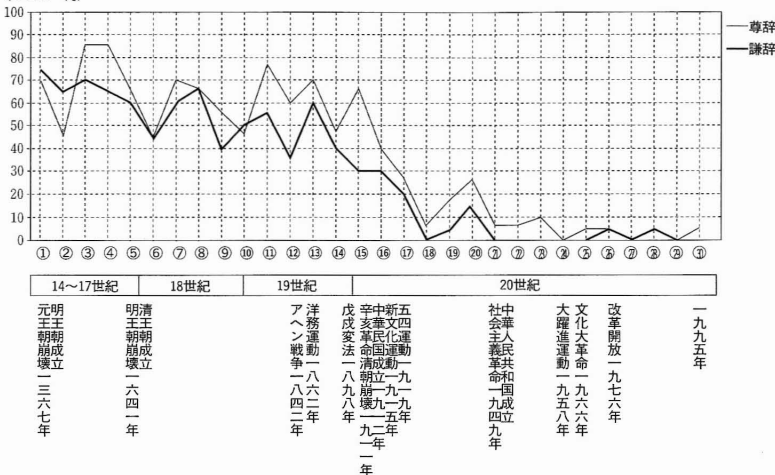


図 敬語の通時的変化

はできない。ここで、中国語敬語表現の衰退要因について、社会言語学の視点から考えてみたいと思う。

### (1) 社会的環境の変化

二〇世紀初頭中国において、辛亥革命の勃発、清王朝の崩壊、そして中華民国の成立などの大きな社会的変化があった。このような

せる新文化運動、文学革命運動が繰り広げられた。一九一九年植民地支配や封建主義に反対し、「民族自決」と「孔子打倒」の旗印を掲げた五四運動が起こった。それにより、伝統文化への攻撃が一層強まり、伝統的な世界観、価値観、礼儀礼法を尊ぶ儒教倫理観の威信が大きく揺らいだ。このような社会的背景の中で、敬語表現は急速に減少した。

変化は、単に政治体制や社会制度上の変革をもたらしただけでなく、人々の意識の面においても大きな影響を与えた。辛亥革命後、伝統文化への反省と批判の声がしだいに高まり、一九一五年頃から伝統的儒教文化に対して猛烈な批判を浴び

その後幾度の戦乱を経て、一九四九年に中華人民共和国が成立した。五〇年代から共産主義理念の下で、土地財産の均分、資産階級の消滅などを目指す社会主義改造が計画実行され、一九五八年の「大躍進」運動により共産化が一層推し進められた。一九六六年に文化大革命が起り、人々の社会意識はさらに大きく変化し、人間関係においても敵か同志かという階級闘争の影に覆われるようになった。一九七六年に文革が終結し、その

後改革開放が始まり、中国社会はイデオロギー優先の社会から経済優先の社会へと再び変貌し始めた。九〇年代の中国社会では、特に文革中に生まれ育った世代の人々にとって、「君臣、父子、男女、上下、尊卑」などの陰陽秩序に基づく儒教の礼儀礼法などは遙か遠い昔の存在となってしまった。このような社会的流れの中で、伝統的な敬語体系は消え去っていったのである。

## (2) 儒教教育システムの崩壊

敬語体系は、音韻、文法体系とは違い、その言語社会の価値観や人間関係の理解の仕方などの知識体系に多く依存している。中国語の伝統的な敬語体系は儒教の価値体系によって支えられた一群の知識体系である。「尊、貴、大、高、龍」などが陽で、「卑、賤、小、下、犬」などが陰である（『易経』）。礼は陰陽の原

理に則っている（『礼記』）。儒教倫理観の形成に欠かせないこのような知識体系は、従来四書五経などの儒教典籍の学習を中心とする学校教育や官僚昇進制度「科挙」などによって伝承されていた。

一九世紀後半の「洋務運動」や「戊戌変法」によりこのような教育上の保証が揺るぎ、一九〇五年に「科挙制度」が廃止され、システム化されていた儒教思想の教育が途切れ始めた。王朝崩壊後の教育システムは、西洋啓蒙主義教育の影響を受ける間もなく、植民地支配に対する「独立救国」の民族教育に傾き、人民共和國成立後は共産主義のイデオロギー教育へと変化した。

このように今世紀初頭から、教育システムのの中で、儒教典籍は一般教科から遠ざけられていった。儒教教育システムが崩壊すると、伝統的な礼法にかかわる知識体系の継承が途絶え、複雑な敬語表現

の伝授もその教育上の保証を失ったのである。

## (3) 言語行動への価値観の変化

儒教の倫理観は、漠然としたものではなく、『論語』や『礼記』などが示すように、いつ、どんな場面で、誰に対してどういう行動を取るべきかについてこと細かく規定されている。たとえば、君主には北向きの姿勢で会うべし、客の右側こそつて歩くべし、年長者の前で人と大声でしゃべるべからず、客の前で犬を叱るべからずなど。どんな倫理規定でも、すべてそれに従うことはよいことだという価値観の土台の上に成り立っている。昔儒教の倫理規範が守られたのは、「礼の規定に従うことは、立派な人間「君子」のすることである」という価値観があったからである。礼の規範への価値志向は敬語使用の最も重要な動機づけの一

つである。しかし、一旦現実社会で人々が逆の価値観へと傾斜し、よい人間になるためにそんなことをする必要はなく、むしろそうする方が古臭く、封建的であるという価値観が形成されると、旧来の倫理規定は規範としての威信と魅力を失うことになる。今世紀前半の中国社会はまさにこのような儒教倫理観が崩れかけた時代にあった。

魯迅は、一九三〇年代に『且介亭雜文二集・論諷刺』の中で、次のように敬語を使って揶揄する人間を風刺した。

貴姓？（ご尊名は？）

敝姓錢。（錢と申します。）

哦、久仰久仰！還沒有請教台甫：

（あ、ご高名はかねがねうかがっております。で、ご雅号は…）

草字闊亭。（闊亭と申します。）

高雅、高雅。貴處是…？（それはご高雅なこと。で、ご郷里はどちら…？）

魯迅の批判は、当時このように揶揄する人、つまりことばの上で礼の実践をしていた人が、皮肉の対象となりつつも、まだ現実が存在していたことを物語る。

しかし、現在ではこのような会話はもはや聞かれなくなった。敬語消失の背景には、言語行動において人に対して「敬而無失、恭而有礼」（敬して失なく、恭しく礼あり）という、儒教が「君子」と標榜していた理想の人間像に対して、人々はある種の偽善性を感じ、率直明快な言語行動により高い価値を見出したという言語意識の変化があったと考えられる。

#### 四 むすび

現代中国語において、間接表現、親族呼称の転用、人称代名詞の回避など発話ストラテジーによる丁寧さの表現は依然存在するが、儒教の礼法に基づく従来の

敬語体系は、近現代中国の社会体制や教育システム、価値観などの激変によって、姿を消してしまつたのである。

#### 【参考文献】

木村英樹（一九六）『漢語第三人称代詞敬語制約現象的考察』『中国語文』商務印書館

興水 優（一九七）『中国語における敬語』

『岩波講座日本語4 敬語』岩波書店

彭 国躍（一九九）『近代中国語の敬語システム——陰陽』文化認知モデル

魯迅（一九三）『且介亭雜文二集』人民文学出版社

（ほうこくやく／社会言語学）

